
風唄

風唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風唄

【Nコード】

N9178A

【作者名】

風唄

【あらすじ】

私はある谷で、気付いたら唄っていた、幾日も幾日も、そしてある日、私の谷に旅人が現れた…

（前書き）

私がペンネームとしている風唄^{カザウタ}：それをテーマに小説を書いてみようかと思いました、因みに小説名は風唄^{カゼノウタ}とお読み下さい、タイトルが先行して出来た作品です（汗）

いつからだろうか、

私が私に気付いたのは、

気付いたら、私は唄っていた

悲しい唄、嬉しい唄、勇気の唄、恋の唄、愛の唄…

いつも私は唄っていた、

いつもいつも、ずっと長い間、

いつも私は、ある谷で唄っている、

ある日、私の谷に旅人が現れた、

谷は、街道からも、大きな街からも離れた、小さな村の近くにある、

普通、旅人が来ることはない、

その旅人は、まだ若く、冬にも関わらず、薄手のコートを羽織り、
薄汚れた大剣を一本背負っていた、

私は彼に、唄を唄った、

勇気の出る唄を、

希望の唄を、

彼は、一瞬こちらを向いた気がしたが、すぐに前を向き村の方へと歩いて行った、

彼は村に用があるのだろうか、

そう考えながらも私は、唄を唄い続けた、

彼に幸せが訪れるように、と、

彼の目は、とても澄んでいた、

そして、彼の剣からは、血の臭いがした、

私は、彼が見えなくなるまで、希望の唄を、唄っていた、

翌日、彼が現れた、

昨日と同じ恰好で、

彼は、谷の岩に座り、私に話し掛けてきた、気がした、
実際は独り言なのだろう、

何を言っているのかはわからない、

私には理解できない、

ただ、彼が焦っていることだけはわかる、

何に焦っているのだろうか、

しかし、ただ私は唄うことできない、

私は唄うだけだ、

だから私は彼に唄う、

励ましの唄を、夢の唄を、

あれから数日が経った、

旅人はまだ、村に居るらしい、

彼は時々、私の谷に来て、何かの細工をしている、

何をやっているかは知らないが、彼の悲壮な表情を見ると、大変なことだと言うことはわかる、

だから私は、彼の傍で唄っている、

彼が頑張れるように、と、

翌日、彼は一人では無かった、

彼女は、たしか村の女の子だ、

年は旅人とさほど差は無いように思える、

旅人はいつものように、何かの細工をしている、

ただ、いつもより、表情が明るい、

時折、笑みも見せている、

彼女は、くすくす笑いながら、彼を手伝おうとしているが、その度に彼に止められているようだ、

見ていて、微笑ましい状況である、

今日、私は彼等に恋の唄を唄ってあげよう、

翌日から、彼女は彼について来るようになった、

そして、彼は何か大仕事をするようになった、

彼女は心配そうに眺めている、

何を作っているかわからないが、大変なコトだけはわかる、

私は、また、昨日のように恋の唄を唄う、

彼等の傍で、彼等の邪魔をしないように…

旅人が来てから二週間ほどが過ぎた、

旅人は毎日、私の谷に来ては、何かを作っている、
少し前からは、村の女の子もついてくるようになった、

この谷の日常は、少し、変わった、

そんなある日、谷に人が現れた、

見たこと無い人だ、

時刻は深夜、細身の体に厚手で黒っぽいのコートを羽織って、腰に
レイピアのような細く、軽く、扱い易そうな剣を持っている、

ほかにはなにも持たず、旅人には見えない、

…彼の目は鷹のように鋭く、獲物を狙うような目だ、

どうみても普通の目的で、村を訪れているようには思えない、

だから私は、彼に唄を唄った、

恐怖の唄を、不安の唄を、

出来るだけ恐ろしい唄を、

私が唄うと、彼の表情は青ざめ、何かをブツブツ呟いていたが、やがて足速に去って言った、

私は、彼に悪いコトをした気がしたが、何故か、不安を隠し切れなかった、

翌日深夜、また、誰かが訪れた、

昨日の男とは違う、

恰好は不自然なまでに昨日の男と同じなのだが、体格はがっちりとしており、背中に長い大剣を持っている、

私の不安は消えない、

彼等が何か不幸を連れてくる、そんな気がしてならない、

だから今夜も私は、恐怖の唄を唄った、

彼が早く帰るように、なにも村に起こらないように、と、

彼は、なんとか帰ってくれた、

一安心だ、

いつのまにか、夜は明けていた、

翌日、いつものように旅人と女の子は現れた、

旅人はいつものように、何かを作り始めた、

私は不安だった、

何かが起こる予感があった、

だから私は唄を唄った、

不安の唄を、

彼を不安にさせるように唄った、

なるべく不安を掻き立てるように、と、

今日は彼は帰らなかった、

深夜になっても、帰らずに谷の中にいた、

彼の表情には悲壮な決意が見て取れた、気がした、

私は、彼に不安の唄を唄ったせめてもの罪滅ぼしとして、彼に安堵の唄を唄った、

こうして、夜は更けていく、

時も過ぎ、もうすぐ夜が明けようとしているとき、
村の方から、火の手が上がった、

それも一つでは無く、複数の大きな火が、上がった、

それに伴い、血と肉の焼ける臭いを、風が運んできた、

明らかに村の方から、

旅人は、飛び起き、悲壮な表情のまま、村の方に走り去った、

悲壮な顔をしている彼を止めることは出来ない、と、感じた、
私は彼の背に、勇気の出る唄を、唄うしか出来なかった、

それと入れ違うように、村の女の子が走ってきた、

彼女は彼を探していたのだろうか、

恐らくそうだろう、

彼女は、彼が居ないのを確認すると、村の方に走っていった、

私は、彼女を何とか引き止めようとした、

私は彼女に恐怖の唄を、不安の唄を唄った、

今、村に戻って、助かるとは思えなかったから、

しかし彼女は、振り返ることも無く、走っていった、

その間も、村からは血や肉の焼ける臭い、死の臭いが漂っている、

一体何が起きているのか、

不安なのだが、私には、なにも出来ない、

私は無力感に苛まれた、

私に出来ることは、唄うことだけだ、だから私は唄を唄った、

勇気が出る唄を、村人に届くよう、願いを込めて、

やがて、谷に、人が現れた、

数が多い、おおよそ30人はいると思う、

私は村人か、と、一瞬、一瞬だけ、期待した、

しかしその期待は、すぐに裏切られた、

その集団は、皆が皆、先日、深夜に訪れた人と同じ恰好をして、手に手に、金品らしき物を、持っている、

彼等からは、血の臭いがする、

明らかに彼等がやったのだ、

私は漸く合点した、

私は初めての感覚に苛まれた、
人はこれを、

「憎しみ」
と呼ぶ、

だから私は唄を唄った、

その場の感情に任せて、

：憎しみの唄を、

彼等は何か口々に言って怯えた表情をしていたが、先頭の男が何かを一喝すると、彼等は歩き出した、怯えた表情のままだったが、

そこに、旅人が現れた、

憤怒の表情で、駆けてきた、
べつとりと血のついた大剣を手に持って、

彼は彼等に追い付くと、まず後ろの男を、不意打ちで切り捨てた、

ようやく彼等が、彼の存在に気付いた、

男達は一斉に剣を抜き、旅人にかかっていった、

旅人は強かった、

大剣をまるで枯れ枝でも振り回すように、剣を振り回していた、

一度振る度に、彼等が一人、一人と、倒れて行く、

しかし、旅人も神では無い、

獅子奮迅して10人ほど倒したがそれまでだった、

圧倒的な人数差に旅人は、遂に倒れた、

男達は、醜惡な笑みを浮かべ、旅人を見下す、

そして、旅人にとどめを刺そうと、剣を振りかざした、

しかし、その剣が振り下ろされることは無かった、

旅人が何かを懐から取りだし、素早く火をつけ、男達の下に投げた、

旅人が投げたものが小爆発を起こした、
その爆発に応呼するように、地面が爆発した、

その爆発は並では無く、男達は一瞬で火の波に吞まれ、焼死した、
ただ、旅人も無事では無かった、

だが、旅人は大怪我を負いながらも、生きていた、気絶しているようだが、呼吸がある、
まだ、旅人は生きていた、

そこへ、運よく雨が降ってきた、
雨は火を消し、これで旅人が助かると、私は喜んだ、

私は彼に、希望の唄を、喜びの唄を、唄った、

いつのまにか、夜は明けていた、

そこへ、彼女は現れた、

谷に向かい、必死に、駆けてきた、

彼女は谷につくなり、泣き始めてしまった、

私は彼女が、彼が活着ているのに気付いていないと、気付いた、

だから私は彼女に気付いてほしくて唄を唄う、

希望の唄を、生きる喜びの唄を、

しかし彼女は気付いてくれなかった、

私は彼女に気付いてほしくて、ずっと唄い続けた、

しかし彼女は気付いてくれない、

一時間ほど彼女は泣き続けた、

ようやく、泣きやんでくれたと、私は、少し安堵した、

しかし、彼女は懷から、ナイフを取り出した、

彼女は、彼に何かを告げ、軽く、キスをして、首を切り、生き絶えた、

時間は過ぎて、夕方になり、旅人が起きた、

そして、すぐ隣で死んでいる彼女を見て、何かを呟き出した、

私は、せめて、彼だけは生きていてほしかった、

だから、旅人に励ましの唄を、希望の唄を、唄い続けた、
私の願いを込めて、

しかし、彼は、私の願いを聞いてはくれなかった、

彼は、彼女のナイフを掴み、彼女と同じように、首を、切った、

それから、私は、一つ、唄を覚えた、

旅人と女の子の唄を、

悲恋の唄を、

それから私は、谷で唄い続けている、

旅人と女の子への鎮魂唄、

彼等の悲恋の唄を…

(後書き)

いかがでしたでしょうか？ジャンルはファンタジーでよかったんでしょうか？とりあえず、良かったと感じていただければ幸いですm
〔 m感想などいただけると、もっと嬉しいです／／▽／／〕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9178a/>

風唄

2010年12月4日14時11分発行